

日本生物工学会の和文誌編集委員会は、Fuji Sankei Business i.の企画特集に編集協力をし、第3水曜日に記事を掲載しております。2016年11月16日付で、**第32回「感染症が引き起こすがん」**が掲載されました。

⇒過去に掲載された記事一覧はこちら

感染症が引き起こすがん

がんには、感染症に起因するものがある。国際がん研究機関による調査では、がん発症例のおよそ1/10が、予防可能な感染症に起因している。新種なウイルス、C型肝炎ウイルス、ヒトパピローウイルスなどである。

B型肝炎ウイルスの感染は、慢性肝炎、肝臓癌を招き、肝がん（肝細胞がん）の発症につながる可能性がある。ヘリコバクター・ピロリ菌の感染は、慢性胃炎を経て胃がんを誘発するおそれがある。ヒトパピロー

ウイルスの感染は、子宮頸がん、鼻咽がん、ヒトパピローウイルスなどになる。これらの感染に起因するがんの発症として、まず一次予防が重要である。つまり、感染性病原体を避けること。B型肝炎については、ワクチンの接種により慢性肝炎、肝臓癌、肝がんが予防できるとされており、2014年4月1日以降に出生

のためのがん予防法」のなかで、一度は肝炎ウイルス感染検査を受けることに加え、機会があればピロリ菌感染検査を受けることを推奨している。

B型肝炎ウイルスに感染していることがわかった場合は、専門医に相談して、正しい検査と薬物治療による肝がんの予防をすることが推奨されている。

ピロリ菌に感染している場合は、胃がんリスクの低い生活習慣に改変し、主治医に相談することが推奨されている。薬物治療により、ピロリ菌を駆除することも可能である。ヒトパピローウイルスについては、ワクチンはあるが、上記の「日本人

肝がん（肝細胞がん）

胃がん

子宮頸がん

図1 がんの種類

【大塚夫孝 科長執筆】
協力：日本生物工学会

次掲誌12月21日に掲載

Fuji Sankei Business i. 2016年11月16日掲載